

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	山川 仁
論文題目	パークリの非物質論と常識		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ジョージ・パークリの「非物質論」を取り上げ、そこに見られる一見対立する複数の見解に対して、それらを可能な限り整合的に捉えようとするものである。パークリが非物質論を提示する際に特に留意したのが「常識」の擁護であったことから、論述は、「パークリの非物質論は彼の同時代から現代に至るまでの一般大衆が素朴に抱くはずの常識的信念と相容れるのか、もしそのことが可能であれば、それらはどの程度にまで調和するものなのか、また、それらが互いに相容れる仕方があるとするれば、それはどのような説明によって可能になるのか」という問いを主眼として進められる。</p> <p>本論文は7章からなる。</p> <p>第1章「非物質論の基本体系」では、第2章以降の課題を進めるための予備作業として、非物質論の基本が確認される。非物質論の主要な目的が、懐疑論の論駁、無神論の論駁、常識の擁護にあり、非物質論の基本的枠組みがロックの物質論の枠組みをなす「物質・観念・心」の三項関係のうち物質の存在を否定するものであること、また、これらを提示した『人間の知識の諸原理に関する論考』と『ハイラスとフィロナスの三つの対話』の後年の加筆部分で「思念」という重要概念が強調されたことを押さえた上で、非物質論を構成する「集合体テーゼ」、「相異性テーゼ」、「内属テーゼ」、「EIPテーゼ」について、各々の内容が確認される。さらに、抽象観念説批判、ライクネス・プリンシプル、マスター・アーギュメントに基づく物質否定の議論の要点が示される。</p> <p>第2章「可感的な物の実在性」では、「非物質論において容認される可感的な物は、通常われわれが身の回りの対象に対して認めているような常識的な意味において実在すると言われるに値するものなのか」という問題が検討される。ここでは、「集合体テーゼ」、「内属テーゼ」、「EIPテーゼ」から可感的な物の実在性に関する否定的結論が導かれる可能性が示され、相異性テーゼに訴えてこれに答えようとするルースと、ルースを批判するグレイヴの解釈の要点を確認したあと、観念の規則性、鮮明さ、恒常性に関するパークリの主張に依拠することによって、相異性テーゼによらずに問題に対処する方が示される。</p> <p>第3章「可感的な物に対するわれわれの感官知覚の直接性」では、「非物質論の下で、われわれは身の回りの物を直接知覚すると言えるのか」という問題が考察される。パークリは「直接知覚」と「間接知覚」の区別を行うが、直接知覚の対象が「可感的な物」なのか「各感官に固有の観念」なのかが必ずしも判然とせず、また「可感的な物」は間接知覚されるしかないと考えさせる文言もある。ここではこの問題に答えるために「示唆」と「集合体テーゼ」との関係が論じられ、示唆を、神が与えた観念間の結合規則を心想事成 (fancy) によって受動的に受け取る過程と解釈することにより、感官知覚の受動性とこの示唆の受動性から、「可感的な物」の知覚の「直接性」を理解</p>			

することが試みられる。

第4章「可感的なものの存在の継続性と公共性」では、「非物質論において、われわれが知覚しないときも、可感的な物は継続して存在するのか」、および、「非物質論において、われわれは同じ可感的な物を知覚できるか」という二つの問題が検討される。「EIPテーゼ」からすれば、可感的な物はわれわれが知覚しているときにしか存在しないと考えられることになり、またわれわれはそれぞれに与えられた観念としての可感的な物を知覚するだけということになる。これに対して、ここでは、自然法則に依拠する議論、および、神の心の中の原型的存在という考えを用いることによって継続的存在を説明し、同じく神の心の中の原型に訴えることによって公共性の問題にも答えることができるという解釈が提示される。

第5章「現時点において知覚されていない可感的な物の存在」では、「バークリの非物質論において、未来に知覚されるであろうことがらや過去に知覚されたはずのことがらの把握はどのように説明されることになるのか」という問題が検討される。ここでは、まず、将来の危険を回避するための方途として、「示唆」および「言語による情念の惹起」が指摘され、次いで、過去における可感的な物の存在については、言語によるイメージの示唆によってこれを考える可能性が説かれる。

第6章「心の存在」では、バークリの非物質論において、心についてのわれわれのさまざまな信念がどのように説明されるかが確認される。われわれ自身の心の存在は反省によって直観的に知られ、他の心の存在は言語を用いた意思疎通によって知られ、また、神の心の存在は推理によって知られるというバークリの考えが示された後、人間の意志の存在について、意志を身体運動の原因とすることには困難が伴い、人間の意志と神の意志の「協働作業」と見る余地があることが論じられる。さらに、観念と心の独立性については、「相異性テーゼ」を是認するものとして、「気づき」の有無による心理学的観点からの議論と、「物質・観念・心」という物質論の独立する三項から物質を消去したのがバークリの非物質論であるという、形而上学的観点からの議論を挙げることができるとされる。

第7章「バークリの非物質論の意義」では、これまでの考察に基づき、バークリの非物質論は経験論や観念論の系譜に回収されない独自の特徴を持つこと、そして、バークリの通俗的視点と哲学的視点とを自在に用いる態度は、われわれがさまざまな難問に対処する際に選択されるべき一つの穏当な見方を示すものと考えられることが、論じられる。

(論文審査の結果の要旨)

ジョージ・バークリの非物質論は、その簡潔な論点とは裏腹に、それを詳細に理解しようとする者に困難を感じさせる一見対立するように見える文言が少なくない。話題が極めて原理的・基礎的なものであるだけに、それらの対立するように見えるものを整合的に理解しようとする作業は、多大の労苦と才能を要する。にもかかわらず、一般に「観念論」と称されているバークリの哲学的見解に、少なからぬ人々が魅力を感じ、世界の多くの研究者が、その整合的理解と意義の明確化に努めている。本論文『バークリの非物質論と常識』は、そうしたバークリ研究の一翼を担おうとする試みである。

バークリが常識擁護の立場を鮮明に示していることから、申請者は、標題に掲げるとおり、非物質論と常識との整合に焦点を合わせる形で考察を進める。本論文は7章からなり、第1章で非物質論を構成する基本テーゼである「集合体テーゼ」、「相異性テーゼ」、「内属テーゼ」、「EIPテーゼ」等々について、各々の内容が確認された上で、第2章から第5章までの四つの章において、「可感的な物」の「実在性」(第2章)、その知覚の「直接性」(第3章)、その存在の「継続性」と「公共性」(第4章)、可感的な物の「現時点で知覚されていない場合の存在」(第5章)が論じられる。また、第6章では可感的な物ないし観念と相関項をなす「心」について、その「存在」が多面的に考察され、最後の第7章では以上の考察を踏まえてバークリの非物質論の歴史的意義と現代的意義が論じられる。

主要な章における申請者の特徴的論点を列挙すれば、次のようになる。

第2章では、バークリの非物質論では物が夢や空想の対象と変わらないことにならないかという問題が検討される。ここでは、相異性テーゼに訴えてこれに答えようとするルースと、同一性原理に訴えてルースを批判するグレイヴの解釈の要点を確認したあと、相異性テーゼによらずに、観念の規則性、鮮明さ、恒常性の主張に依拠することによって問題に対処する可能性を、申請者は提示している。

第3章では、バークリの「直接知覚」と「間接知覚」の区別が取り上げられ、われわれの直接知覚が可感的な物の一部に限られていることと可感的な物の認識との関係が論じられる。フッサールの「射影」をめぐる考察に通じるこの考察において、申請者はバークリの議論を丁寧に追い、感官の観念の受動性と「示唆」の受動性とを繋ぐことで、「可感的な物」の知覚の「直接性」を理解しようと試みている。

第4章では、「非物質論において、われわれが知覚しないときも、可感的な物は継続して存在するのか」、および、「非物質論において、われわれは同じ可感的な物を知覚できるか」という、バークリの非物質論と常識との乖離を橋渡しするのに不可欠な二つの問題が扱われる。「EIPテーゼ」からすれば、可感的な物はわれわれが知覚しているときにしか存在しないと考えられることになり、またわれわれはそれぞれに与えられた観念としての可感的な物を知覚するだけということになる。これに対して、ここでは、自然法則に依拠する議論および神の心の中の原型的存在という考えを用いることによって継続的存在を説明し、同じく神の心の中の原型に訴えることによって公共性の問題にも答えることができるという解釈を提示する。神に関わるこの

問題は、バークリが提示する見解の少なさと、主教であったバークリの立場で考えられているはずの明示されない夥しい事柄との間をどう繋ぐかという難しい問題があるが、申請者はあえてこの困難な問題に踏み込み、一定の見解を提示するよう努めている。

第5章では、バークリにおける「危険の回避」が、「示唆」の観点から捉えられるとともに、言語の重要性に光が投げられる。ここでは、バークリの「自然の言語」の考え方とともに、『アルシフロン』第7章のバークリの言語説にも触れられており、一次資料の検討を広範に行おうとする申請者の努力のあとが認められる。

第6章では、心に対するいくつかの視点からの考察がなされているが、ここでは、意志の存在について、意志を身体運動の原因と認めることに困難が伴うことが指摘され、申請者はその問題解決のために人間の意志と神の意志の「協働作業」を構想する。さらに、観念と心の独立性について、「相異性テーゼ」を是認するものとして、「気づき」の有無による心理学的観点からの議論と、「物質・観念・心」の三項が独立でありバークリはここから物質を消去したという形而上学的観点からの議論を挙げるなど、ここでも申請者は独自の解釈を試みている。

本論文には、ときに論旨の説明が不十分な部分があり、歴史的視野をさらに広げて論を一層緻密にすべき部分を残してはいる。しかし、そうした今後の課題はあるものの、申請者の試みは、関連する原典の詳細な検討と、多様な先行研究の調査に基づき、従来扱いつらいとされてきたバークリの非物質論を整合的に読み解くために無視してはならないいくつかの論点に対して果敢にその解釈を進めようとするものである。その成果は、申請者の研究者としての力量を十分に示しており、今後の更なる進展が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年8月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降